

自閉症スペクトラム児と保護者の関係発達

—対人関係発達指導法 (RDI) による事例検討—

Effect of Relationship Development Intervention (RDI) for the improving the relationship
between a child who has autism spectrum disorder and his parents

高橋 ゆう子¹

¹大妻女子大学家政学部

Yuko Takahashi¹

¹Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：自閉症スペクトラム, 対人関係発達指導法, 導かれた参加, 関係性

Key words : ASD, Relationship Development Intervention, Guided participation, Relatedness

抄録

本論の目的は、RDI (対人関係発達指導法) の特徴と効果について、一家族の事例から検討することである。対象は、6歳のASD児とその両親で、約2年間RDIに取り組み、その間、アセスメント(RDA)として親子のやりとりを3回録画した。その映像は、関係性を捉える3つの状態(共同注意、相互調整、間主観性)について評価された(Larkin, et al, 2010)。また、日常生活における母子のやりとりを録画した63場面について母親が振り返りとして記述した内容について、コンサルタントとともに分類を試み、その特徴を整理した。結果は次の通りである。まず、3回のRDAから父親、母親とも共同注意、相互調整、間主観性のいずれにも変化がみられた。次に母親の記述については、その内容が肯定、否定、分析、課題、疑問の5つのカテゴリーに分類でき、否定的な内容が減って肯定的なもの、子どもとの関係性に関する内容が増えた。以上から、RDIが親子の関係性の変容に影響することが推測された。そして、情緒的意欲的關係性に焦点をあてた育て直しをねらったRDIの特徴と課題について考察を行った。

1. 問題と目的

自閉症スペクトラム児に対する療育方法の代表的なモデルとして、行動主義的学習理論を基礎とする応用行動分析や感覚・運動の発達に力点を置く感覚統合、認知スキルの獲得をめざした方法論、発達論的アプローチがある(十一, 2007)^[1]。社会性を促す発達論的アプローチとして明翫(2014)^[2]は、SCERTSモデル、DIR/FLOORTIME、ESDM、RDIを挙げ、次のような共通点があるとした。コミュニケーションの習得は基本的に対人相互作用の場で行うこと、子どもが自身のコミュニケーション行動を有効だと実感できることに重点を置くこと、他者との交流状況における自己の緊張・情動状態の安定化を学習の前提とすることなどである。

発達論的アプローチの一つとされるRDI

(Relationship Development Intervention; 対人関係発達指導法、以下RDI)は、自閉症スペクトラム(以下、ASD)の方とその家族を対象とした治療的教育方法で(Gutstein, 2009)^[3]、社会的文化的視点に立ったGuided Participation (Rogoff, 1990^[4]・Rogoff, 2003^[5])、"導かれた参加"という考え方を重視する。ASD児の場合、さまざまな脳の脆弱性と環境的な要因が関係して、Rogoff(1990)^[4]のいう"導かれた参加"の関係(Guided Participation Relationship; 以下GPR)が、養育者との間で構築されにくい状況があるため、養育にあたる親も不安定になりやすく、家族システムの機能不全が起る。Hobson(1989)^[6]によると、ASDは生物学的基盤に根ざすところの環境と情緒的意欲的關係性(relatedness)の障害で、機能的に、対人関係(personal contact)に不可欠な、行為と環境の対人

的相互協応が円滑に作動しない。Trevarthen ら (1997)¹⁷⁾も、ASD は身体接触や動きによる非言語的な手段を用いたコミュニケーションが難しく、他者と態度、経験、目的を共有することを通して教わる、学ぶための正常な動機が働かないことを指摘する。

現在、療育の主な流れとしては、子どもの認知や社会的スキルを伸ばしたり、子どもの発達の特徴を踏まえた補償的援助を行ったりして適応を促すことが多いと思われるが、RDI は、全体的な家族の養育機能の回復をねらい、子どもの状態に応じた対応の工夫と育て直しを行っていく。

RDI ではまず、言語的コミュニケーション以前の、非言語的、情動的コミュニケーションを、養育者がていねいに導きながらやり直すことを試みる。つまり家族との継続的な対話を基盤にした養育支援、具体的には定型発達の親子関係をモデルとしつつ、親子双方のレディネスを整え、養育者が子育てに自信がもてるように、援助者（コンサルタント、以下 Co）が導くことになる。先に述べた“導かれた参加”の最初の基本過程は、親子相互に互いの行為や反応を参照しあいながら、感覚を共有したり、一緒に動いたり作ったりするという、何気ない日常のやりとり（共同の営み）のプロセスである。その中で乳児は情緒的雰囲気やタイミング、イントネーションの特徴などを通して養育者からのメッセージを理解しようとする。RDI では、先のように子どもに合わせたアレンジを試みながら子どもが学ぶ機会を作っていく。

具体的には ASD 児は先にも触れたように、非言語的なコミュニケーションが難しく、身体接触を通して安心したり相手に興味をもったりするどころか、逆に不安定になってしまうこともあるので、まずは傍らに居ることから、ゆっくり動作を合わせてみるなど、ゆるやかな身体接触を通して安心を実感し、その安心を共有できる他者（主に養育者）に興味をもつ機会を作ることから始める。そして、関心を持った養育者のまねをしたりモデルとしたり、さらに社会的参照の対象としていけるように、少しずつさまざまな感覚や感覚を共有する機会を作る。そのようなプロセスを通して ASD 児が自発的に、他者の気持ちや意図についても意識が向けられる機会を保障していく。そのような経験を積んでいくプロセスが、ASD 児が他者、主に養育者から生活の中での学びにつながると考える。

その際、ASD 児が戸惑ったり不安定になったりすることも考えられるので、慎重に関わりつつ、時間をかけて自発的に落ち着くのを待つ、見守るという姿勢が養育者には求められる。

子どもが取り組みやすい足場を作って学ぶ機会を保障する人のことを、RDI では「発達を導く人」という意味を込めてガイドと言い、指示や教示をするインストラクションと区別する。定型発達児は、意図的な指導がなくとも、大人の傍らにいて大人がやることに興味をもって観察したり関わったりしながら多くのことを学び、大人との関係から優れた情報処理能力や問題解決能力を身につけていくが、ASD 児の場合、GPR が構築されにくく、その学びのプロセスが安定しないため、そこに重点を置くことが社会性を育てる基礎になると考える。このように、大人をガイドとして学ぶ関係を構築・確立することをねらいとするのが RDI の特徴で（明翫, 2014）¹²⁾、他の発達論的アプローチと異なる点といえる。このような視点は、子どもと親に分けて介入を行うのではなく、家族に焦点をあてて親子の対話を促すことが子どもにサービスを提供する最善の方法であるとする家族療法的視点（Berg, 1994）¹⁸⁾に通じるもので、親子の関係性の変容が結果的に子どもの社会性の発達につながると考える。Beurkens ら（2012）¹⁹⁾は、25 組の親子を対象に相互作用について検討し、特別なトレーニングで介入するよりも、日常生活のやりとりにおいて、相手とペースが合っていることを意識したり、子どものできる力を推測しながらどこでどんなふうに誘いかけるかなど感覚的な調整したりすることが重要で、それらが安定したコミュニケーションにつながるとし、RDI の有効性を示唆した。ここでは、RDI に取り組んだ家族の親子の相互行為の変容と、相互行為に関する母親の振り返りが記述された内容の分析を通して、RDI の効果と課題を検討することを目的とする。

2. 方法

2.1. 研究協力者（事例となる家族）の概要

今回、研究の対象となったのは、ASD と診断された男児（小学校低学年通常学級在籍、初回面接時は幼稚園年長で卒園間近）A 君とその両親（30 代後半）である。母親は A 君が幼稚園のころ、同年代の子どもと同じように動けないことが多かったため発達に不安を感じた。3 歳時、吃音が気に

なって療育センターに相談に行ったところ、「広汎性発達障害」と診断され、月に1回のペースで療育を受けた。その後、4歳時でASDと診断(IQ81)された。小学校では通常学級に在籍、学習面での困難は見られないが両親はA君の対人関係や集団行動について不安で、家族を対象として支援を行うRDIに興味をもった。

2.2. 倫理的配慮

事例の公表にあたり、対象となった家族の許諾を得た。また、プライバシー保護のため、表現上本質を損なわないような配慮を行った。

2.3. RDIの進め方と方針

RDIは、ファミリー・コンサルテーション・プログラム(FCP)にしたがって家族とCoが主に映像を活用してやりとりする。まず、課題抽出のため、親子の相互行為に関するアセスメント(Relationship Development Assessment: RDA)を行う。次に、Coが出した課題に合わせて、日常生活におけるやりとりを録画、その映像を通して親自身のガイドについて振り返り、記述を行う。そして、提出された課題についてCoがフィードバックをしたりディスカッションを行ったりして、親子にとって課題になることを、一緒に抽出した。

A君の場合、当初、自分の思ったことを一方的に話したり、親を参照することなく自分なりに考えてやろうとしたりするなど、相互コミュニケーションの難しさがあった。両親は、その都度、理屈を話して理解を促そうとしていた。そこから推測された親子のやりとりの特徴は以下の通りである。“ことば”でのやりとりが先行する形で、「どうすべきか」に重点が置かれ、一緒にやりとりを楽しみ、経験を共有するというプロセスが不足している。つまり、定型発達児とその養育者が乳児期から幼児期にかけて日々繰り返される、情緒を伴った何気ないやりとり、Hobson (1989)⁶⁾のいう情緒的意欲的応答性(relatedness)が不十分であることが推測された。

そこでまず、“ことば”でのやりとり以前の非言語的コミュニケーションに関する課題を出した。例えば、立って手をつなぎ、顔を見合わせるようにしてアイコンタクトが取れるのを待って、つないだ手を大きくゆっくり振りながら、少し先の方を見て、「せーの」と発声し、子どもがついてきそ

うな感じを確認して一緒にジャンプすることを課題として出した。また、両足を伸ばして向かい合い、両手をつないで上体を前後に動かしたりすること(ギッタンバッコン)なども行った。これは、相手が手を引くときは、力を抜いて引っ張られ、相手が力を緩めたときは引かなければならない。力任せではなく、相手を見ながら、引っ張ったり引っ張られたりすることを課題の一つとした。上手にできるというよりも、ペースを落として調子を合わせる感じを共有したり、うまくいかなくても一緒にからだを動かして、ずれる感じもおもしろがったりすることをねらった。その後、遊ぶことから次第に、小さなカーペットを両端に並んで一緒に巻いたり、タオルをたたんだり、簡単な料理を協力して作ったりするなど、少しずつ親が主導する日常生活における活動の一部を担って参加し、一緒にやることを取り上げた。最初から楽しめなくとも、子どもが親のやることに注意を向けて推測しながら加わっていけるように、声のトーンや表情を変えたりやや大きめに動きを加えたりしながら、誘いこむことが両親の課題となった。

Coと母親との映像を通したやりとりでは、「Aがこうした(こう言った)ときに、自分(母親)がどうしたら、A君がどうしたか」というように行動に焦点を当ててそれを評価するのではなく、A君の行動や様子を見て「どんなことを感じたか」、また、「どんなことを思ったり、言いたくなったりしたのか」など、母親自身に生じた感情や思いに焦点を当てて、そのうえで「どんなことを伝えられたのだろうか」、さらに「どんなふうに伝えることができるか、どう表現することができるか」などについて話し合った。その際、Coは映像を見て、二人のやりとりについて感じたことや、母親の気持ちが推測された部分について述べ、母親が思い当たりやすいように例示をすることを心がけた。今回、分析した期間は、約2年間でCoは30の課題を出した。

2.4. 分析1: RDA(アセスメント)における親子の相互行為の変容

アセスメントで行ったアクティビティは、自由遊び、ボールや太鼓を使ったやりとり、工作、パズル、写真や絵本などを一緒に見ることである。A君と両親がそれぞれ4つのアクティビティを5分から10分弱行った場面を撮影、録画した。今回、

分析したのは開始時(ベースライン)と約1年後、約2年後の計3回である。映像のアセスメントにあたっては、Larkinら(2010)^[10]の3つのスケール(①共同注意、②相互作用に関する調整、③間主観性の状態)を用いた。各スケールに4つのレベルを設定(表1)、それぞれのレベルについて、どの程度起こっているように見えるか、表2のようにコーディングを行った。父子、母子の関わり(3つのスケール)について、各スケールのレベルごとの重みづけにコーディングされた値をかけたものを合計し、それを評定者数(報告者を含むRDI認定コンサルタント3名)で割って平均を算出した。今回、分析したのは父子、母子それぞれ4場面、計8場面の映像である。

2.5. 分析2:子どもとの相互行為に関する母親の記述の変容

約2年間で提出された母親の映像は63場面あった。父親も課題に取り組んだが、母親との映像や母親からの報告が多かったので、ここでは母親のみを取り上げた。母親が映像を振り返って、また課題に取り組んで考えたことなどについて記述された内容を意味のまとまりが崩れないように区切ったところ、文章の総数は185となった。その文章を分析1のアセスメントの時期に対応させてベースラインから1年後、1年後から2年後の2つの時期(以下、前期、後期)に分けて、記述された内容、またその対象となった人について母親とともに分類を試みた。

表1 アセスメントのスケールとレベル、重みづけとその内容(Larkinらが作成したものを簡略化)

スケール	レベル	重みづけ	内容
①共同注意	注意を向ける様子がみられない	-2	子どもは他者にも対象(物)、出来事にも注意を向けない
	単独・単一の注意・関わり	-1	子どもは、物だけに注意を向けて関わっている
	サポートされた共同注意	1	親子は、同じ物(対象)に注意を向けて関わっているが、子どもは親の関与にあまり目が向かない
	連動・統合された共同注意	2	親子は、同じ物(対象)、また互い(相手)に対して注意を向けて関わっている
②相互作用に関する調整	偶発的な調整・一致がみられない	-2	共同の取り組みがうまくいかず、バラバラな(協調や調整がない)経験をしている (例) 親は、子どもが興味を示していないことに誘い返もうとする
	偶発的な調整・一致	-1	関わりはあるが、バリエーションが限られている(例) ボールのやりとりはしているが、おしゃべりしたり変化をおもしろがったりしない
	工夫はあるがバランスの悪い偶発的な調整・一致	1	偶発的な調整や工夫がみられるが、一方だけが調整や工夫を行っている (例) 親は面白くなるように声をかける
	バランスのとれた偶然性への調整と工夫	2	互いに思いやり、敏感な応答性が見られ、共通のゴールに向かって協力するようなバリエーションがある (例) 親子双方が、変化を加えて面白がる
③間主観性の状態	交流はみられない	-2	二人の間に交流がない、相互作用のパターンのない身体接触のみ (例) 子どもは親にくっついてはいるが、親からの誘いに応じない
	行為の協調・一致・調整がある	-1	道具的コミュニケーション、互いに断片的なやりとりでつながりが見られない(例) 子どもは親に頼んだりするが、アイコンタクトや一緒に動くことはない
	意図の強調・一致・調整がある	1	互いの相手の行動を予測、共通のゴールに向かって動く (例) どうやったらいいか話しながらやりとりする
	経験の協調・一致・調整がある	2	感情・情緒的な関わりが見られ、相手の反応に関心を示す、意見や記憶を共有、象徴的なやり方で物を扱う (例) 子どもは何かを手にして、以前に遊んだことを話題にしたりする

表2 3つのスケールの4レベルに対するコーディング

頻度		コーディング	参考
Usual	普通に起こっている	3	定型発達児と保護者のようなやりとりが行われている
Often	しばしば起こっている	2	6,7回(Usualまではいかないが、よく起こっているという印象がある)
Sometimes	ときどき起こっている	1	2,3回(Oftenほどではなく、たまに見られるくらいの印象がある)
Not at all	少しもない	0	0回(起こる様子がみられない、感じられない)

その結果、内容の分類のカテゴリーは5つ(肯定的, 否定的, 疑問, 分析, 課題)に分けられた。記述された内容の分類例は表3に示す。また、記述された対象者はA君, 母親自身, 親子, その他の4つに分類できた。

2.6. 分析3: Coのコメントの内容の変容

母親から提出された63場面の映像とその記述に対して、Coがコメントを行った。その内容を意味のまとまりが崩れないように区切ったところ、文章の総数は152となった。その文章をRDIコンサルタント1名とともに分類を試みると、その内容は6つ(現状の確認, 子どもの成長の確認, ガイドの評価, やりとりの評価, ガイドの提案, 課題のポイント)に分類できた。コメント内容の分類例は表4に示す。

表3 母親の記述の分類例

カテゴリー	内容例
1 肯定的	自分が先に進むところをこちらを見て「ニヤッ」と笑い、「やっていい？」と確認する。(子どものこと) 子どもの意見を取り入れてリズムを取ったが、実施にやるときは私に合わせようとし、私も余裕が出てきたと感じた。
2 否定的	後で気づいたが、子どもがめくろうとしているのを無意識に押さえつけていた。 ディズニールンドの映像を見て、私が楽しく歌うが、子どもが乗ってこない。(子どものこと)
3 分析	日頃の会話に気づいていないが、けっこう否定的な意見を言っている自分に気づいた。 声かけがよくなかった。他の声かけを、と感じているがどうか、わからなくなっている。
4 課題	目的を忘れてしまっていたので、もう一度、表情で感情を伝える試みをやってみたい。 自分の気持ちを口にしたり、子どもの気持ちの揺れを味わうような会話がまだできておらず、課題になりそう。
5 疑問	子どもの想像を広げるにはどうしたらよいか。 子どもは合わせないといけないと思っているのだろうか。

表4 Coのコメントの分類例

カテゴリー	内容例
1 現状の確認	お子さんは手元に集中、ママが声を出しても見なかったですね。 ママの、こっちに持つていこうとする意図が強い感じでしたね。
2 子どもの成長の確認	ママの機嫌を予測するような様子が見られましたね。 お子さんの方から「どう？」と確認。勝手に進めることが減ってきました。
3 ガイドの評価	ママの表情がリラックスしていて余裕を感じられた。 よくムツとしないで、がんばったなあと思いました。
4 やりとりの評価	言葉を介さずに頷きあっていましたね。 話し合っているとき、どう決まったかよりもアイデアを出し合っている様子がいい。
5 ガイドの提案	お子さんが自発的に手渡すように、手をちょっとだけ出して待つてみていいかも。 やってみた感じで、最初から考えていたことではなく、違うことをしてみていいかも。
6 課題のポイント	結果ではなく、そのときの楽しいね、という感じを共有するって大事。 眼で見ただけではわかりにくいやりとり、感じとして伝わってこくことも大切ですね。

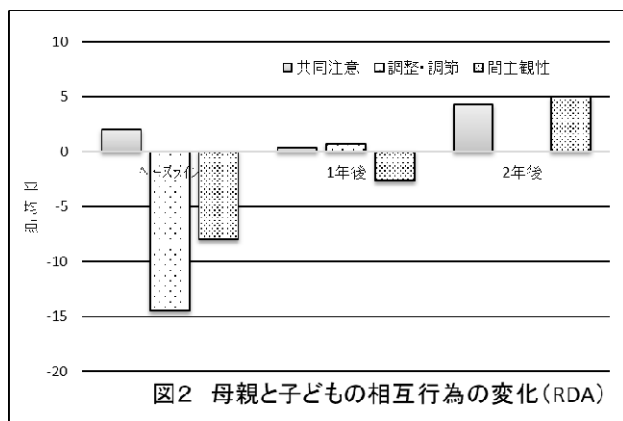
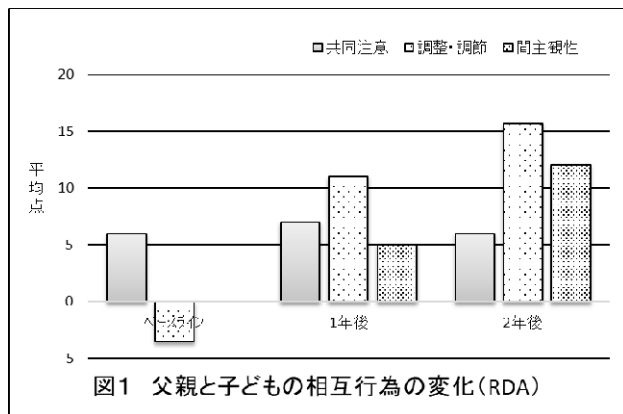
3. 結果

3.1. 親子の相互行為の変容

A君と両親の相互行為のアセスメント結果は図1, 図2の通りである。まず、A君と父親との相互行為をみると、大きく変化したのは相互調整で間主観性が続いた(図1)。RDAの映像を見ると初回、父親はA君と視線を合わせながらも、A君が失敗しないように説明しながら関わっていたが1年後の映像では、A君が考えるのを待つ様子が見られた。2年後では声かけが減って表情でのやりとりが増え、感じや感覚を共有していると思われる場面が増えた。

一方、母親は開始時、子どもに「一緒に」やることをやや強いる形で関わることが多かった。母親は「一緒にやらなくては、という思いが強くなりすぎて焦ったら、Aが乗ってこなくて、さらに

指示するような声かけをしてしまった。」と感想を述べた。1年後の映像では、先回りするような声かけが減って相互調整が変化することがわかり、母親自身も「緊張せずに楽しめた」と述べた。2年後には、お互いに顔を見合わせて感情を共有しているような場面が増えて間主観性に変化が見られた(図2)。



3.2 母親の記述の変容

方法で示した通り、分析の対象となった文章数は185だったが、それを2つの時期に合わせて5つのカテゴリーに分類したところ、前期の文章数が83個、後期が102個であった。当初は、「イライラ」「～してしまった」「工夫が足りなかった」「このままでいいか判断できなくなった」「気がつくことやりを教えてしまった」のようにどちらかというと否定的な内容が多かった(図3)。後期になると「焦らずやりとりできる自分がいた気がする」「子どもは成長したと思うが、私が成長していないと思う」など、自身の課題に目が向く内容が増えた。さらに「一緒に笑った」「ゆったりでき

たかもしれない」などの記述が増え、「途中で、呼吸を合わせてみた」など試行錯誤する様子も見られた(図4)。記述された対象者についてみると、前期はA君と母親自身が多く、それぞれ4割程度で否定的なものが多かったが(図5)、後期になると、親子のやりとりに関する内容が増えた(図6)。母親は、自分が焦ったり「こうした方がいいのにと強く思ったりしたときに、うまくガイドができないなど、冷静に振り返りつつも、Coから自分のリソースについて問われると「子どもと過ごすのが好きなところ」と答え、子どもとの関係が安定している内容が記述された。

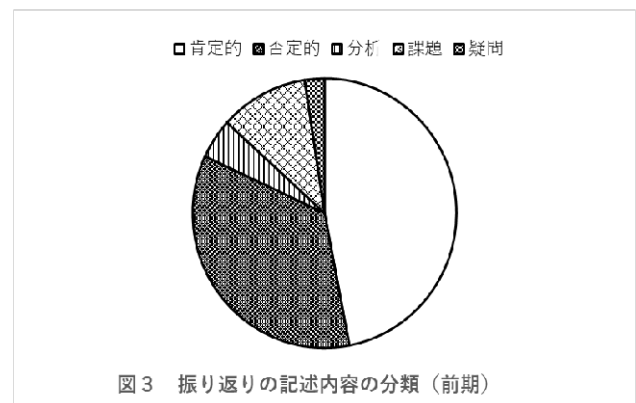


図3 振り返りの記述内容の分類(前期)

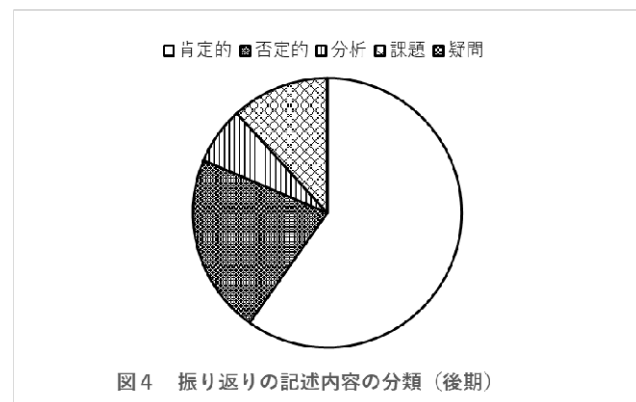


図4 振り返りの記述内容の分類(後期)

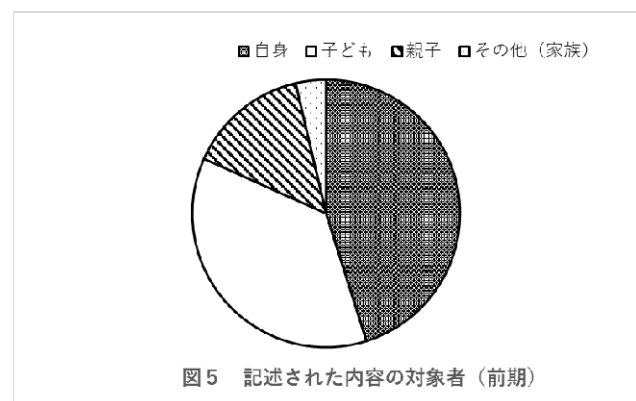
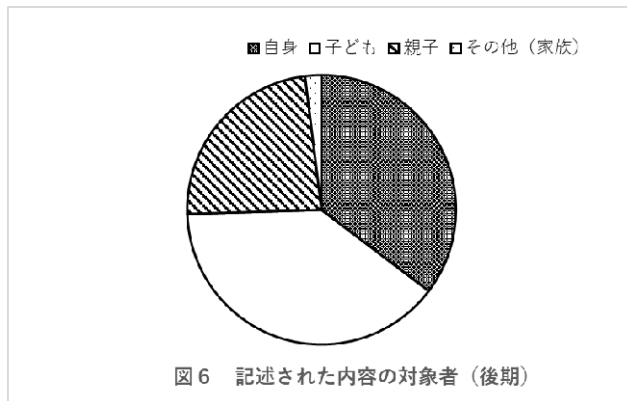
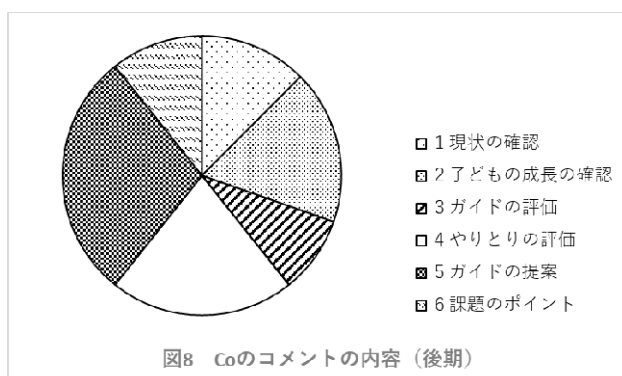
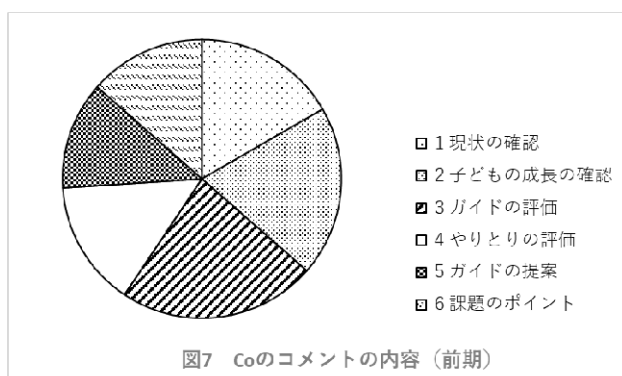


図5 記述された内容の対象者(前期)



3.3 Coのコメントの変容

方法で示した通り、コメントの文章数は152となったが、それを母親の記述に対応させると、前期が96個、後期は56個となった。6つに分類したカテゴリーの割合を前期と後期で比較してみると(図7, 図8), 前期と比べて後期は、ガイドである母親の評価が減り、やりとりの評価やガイドの提案が多くなったことがわかる。



4. 考察

4.1. 親子の関係性の変容におけるRDIの効果

今回、分析の対象となった家族に対するRDIの効果について、共同注意、相互作用に関する調整・調節、間主観性の3点から検討した結果、親子のコミュニケーションが促されたことがRDA(アセスメント)から推測された。そのような親子の相互行為の変容は、日常生活のやりとりの映像と記述された内容からも推測された。父親は、最初からA君の行動を先回りするような行動は見られず、ゆっくりとしたペースで関わっていたが、あまりA君とアイコンタクトを取る様子はなく、ていねいに物を操作する意味ややり方を説明することが多かった。変化がみられたのは、説明する言葉が減って、A君が考えて何か言うことを待ったり、一緒に確認しようとして顔を見合わせたりすることが増えて、参照や非言語的コミュニケーションの幅が広がったことである。一方、母親は父親とは対照的で当初、声かけが多かったが、63場面の映像について、自らのA君に対する働きかけを振り返ったり、映像を介してCoとやりとりしたことが、ガイドの変化に影響を及ぼしたことが推測された。

母親の記述とCoのコメントを突き合わせてみると、母親は始めたころ、A君をガイドすることについて「頭でわかっているけれどできない」などと自分自身の取り組みを否定的に捉えることが少なくなかった。前期においてCoのコメントは、ガイドとして評価できる内容、A君とのやりとりで評価できる内容が多かった。このようなCoとの振り返りは、A君とやりとりする母親の不安を軽減したことが推測された。後期になると母親は、A君の気持ちが推測しやすくなり、またちょっとした小さな変化に気づきやすくなるなど、ガイドとしてできているかどうかという評価よりもA君とのやりとり自体に目が向くようになった。この時期、Coも肯定的な評価よりも、母子のやりとりから見えたことや考えたことをそのまま印象として述べ、Co自身が映った映像を例示する形でガイドの提案をしたりすることが多くなった。

RDIでは、養育者が子どものガイドになることによって子どもの社会性が促されると考えるので、ガイドとなる養育者がこれまでの子どもとの関わりを見直して築き直しを図ることを援助する。元々人との関係の築きが難しい子どもと関わるた

め、養育者に強い不安が生起するのは当然のことであるが、滝川 (2017) ^[14]は、ASD 児が人との交流への志向性がけっしてゼロではなく、大人への興味や接近のサインはあるので、それをキャッチしてそっと応答を返すところから交流性を育むことがケアのポイントとなると指摘する。したがって、子どもとの関係の再構築を図るために、Co が養育者を支え、時にモデルとなって養育者をガイドするという関係が重要となる。Fogel (2008) ^[12]はセラピストから教示されたことをやった方が早く効果的な結果を出せるかもしれないが、養育者が日常生活で自然なやりとりをする中で、感じたことを元にしながら子どもと関わった方が、子どもと相互的な創造性を発揮する機会 (opportunity of mutual creativity) ができ、養育者の自発性や自信につながることを強調した。黒川 (2016) ^[13]も親子や家族の関係と一般的な人間関係を同じように考えて、実践上の有効性だけに着目するのは、親子の関係を損いかねないとし、親子関係を見直すことの重要性を強調する。そして、子どもを育てる親や養育者を援助することが、療育の専門職の役割の一つであることを指摘した。

本事例では方法でも述べたが、母親の自発性を高めるために Co は、課題を出して結果を評価するというより、母親をガイドすることを意識した。前期では、Co も母親のとまどいや焦りを感じながら、それを話題にするなど、情緒的なサポートを行った。そのような Co とのやりとりが母子関係の安定につながったことが推測された。後期になって、アイデアの提案や例示など、道具的なサポートの機会が増えたが、母親も自らアイデアを試すことも多くなった。Co が母親を支えるというより、Co と A 君の様子について対話し、子どもの成長を共有するような関係に変化したといえる。

そのような Co とのやりとりが、母親自身が子どもとの相互交流について、自ら気づいてモデルとなっていくプロセスを支えることになる、いわばパラレルな関係を築くことになったのではないかと推測された。

4.2 映像による相互行為のアセスメントと RDI の課題

RDI は養育者向けのアプローチで、導かれた参加関係の文脈の中で、時間をかけて ASD の社会性を育もうとするものである。換言すれば、目先の

問題行動への対処ではなく、他者との信頼関係を築く基盤となる情緒的意欲の関係性に焦点をあてて育て直しを図る (Hobson ら, 2015) ^[14]。最初の発達段階での目標は、ガイドによって生じる相互関係 (GPR) を親子間で築くことだが (尾崎, 2016) ^[15]、具体的には Stern ら (1998) ^[16]のいう「赤ちゃんのスローダンス」(母子間の絆が深まるような身体的相互的なやりとり) や Fogel (1991) ^[17]のいう Co-regulation (共同調整) を試みることになる。本事例においても、言葉の代わりに表情でやりとりしたり単純な動きを合わせたりする感じの共有に戻って、そこから役割交替や共同作業を試みる、というような育て直しの経験を積むことで A 君の両親も少しずつ、ガイドできるようになったことが推測された。特に映像を用いた介入とアセスメントが、表情の変化や動きの調整など、非言語的コミュニケーションの変容を捉え、かつ Co と確認する上で効果的で、両親のガイドの変化に影響したことが推測された。

一方、Hobson ら (2015) ^[14]は、RDI が家族ベースで関係性に焦点をあてた養育支援を行うため、影響する要因が多くなり、親子の相互行為のアセスメントが容易ではないことを指摘する。情動や経験の共有などの積み重ねが重要となる関係性の変化は、適切な行動が獲得されたか否かという結果で評価することが困難なため、映像を用いて、プロセスにおける小さなやりとりの変化や特徴を捉えることは重要である。しかし例えば、共同注意についてみると、視線が合っているかどうかだけでなく、視線が合う前後のやりとりなど、文脈を踏まえる必要がある。また、相互性や間主観性についても動きだけでなく、表情などの小さな変化がやりとりにどう影響しているかなど、評価が難しい部分があることが本事例から推測された。

高田 (2019) ^[18]は言語的社会化論の研究にならって動画資料について、言語的発話と身体的行動について文字起こしを作成し、養育者-子ども間相互行為における「発話以前」の言語社会化の重要性を指摘した。特に感情表出と関連する感情語彙への着目は、ASD 児と養育者の関係発達の検討にも有効と思われる。養育支援における映像の活用と、その有効性についてはすでに報告されているが (Lawrence ら^[19], 2012・Trevvarthen, 1997^[7])、養育者と子どもの関係性の質的变化をどう捉えるか、効果測定については今後の検討課題としたい。

謝辞

今回、研究協力を快諾していただいたご家族に心より感謝申し上げます。

付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費（S2929）を受けたものです。

文献

- [1]十一元三 (2007) .広汎性発達障害と発達論的療育論, 現代思想, 青土社, 190-195.
- [2]明翫光宜 (2014) .神経発達障害への治療の進歩, 連合大学院小児発達研究科・森 則夫・杉山登志郎編, 神経発達障害のすべて DSM-5 対応, 日本評論社, 27-31.
- [3]Gutstein, S. (2009). The RDI Book: Forging New Pathways for Autism's and PDD with the Relationship Development Intervention Program, Connections Center Publishing.
- [4]Rogoff, B. (1990). Apprenticeship in Thinking: Cognitive Development in Social Context. New York: Oxford University Press.
- [5]Rogoff, B. (2003). The Cultural Nature of Human Development in Social Context. New York: Oxford University Press. 當眞千賀子訳 (2006) . 文化的営みとしての発達: 個人, 世代, コミュニティ. 新曜社, 371-432.
- [6]Hobson, P. (1989). 認知を超えて—自閉症の理論, 野村東助訳, In Dawson, G. Autism: nature, Diagnosis, and Treatment. New York: The Guilford Press. 野村東助・清水康夫監訳(1994) 自閉症—その本態, 診断および治療. 日本文化科学社, 21-48.
- [7]Treverthen, C., Aitken, K., Papoudi, D. & Robarts, J. (1997). Children with Autism, Diagnosis and Intervention to Meet Their needs. London: Jessica Kingsley Publishers. 中野 成・伊藤良子・近藤清美監訳(2006). 自閉症の子どもたち-間主観性の発達心理学からのアプローチ-, ミネルヴァ書房.
- [8]Berg, I. K. (1994). Family based services: A solution-focused approach. W.W.Norton & Company. 磯貝希久子監訳(1997). 家族支援ハンドブック, 金

剛出版.

- [9]Beurkens, N. M., Hobson, J. A. & Hobson, R, P. (2013). Autism Severity and Qualities of Parent-Child Relations. Journal of Autism and Developmental Disorders, 43(1), 168-178.
- [10]Larkin, F., (2010). The relationship Development Assessment- Research version: Preliminary validation of a clinical tool and coding schemes to measure parent-child interaction in autism. Clinical Child Psychology, 20(10), 1-22.
- [11]滝川一廣 (2017) 子どものための精神医学, 医学書院, 245-270.
- [12]Fogel, A. (2008). Relationships that support human development. In A. Fogel, B.J. King, & S. Shanker (Eds.). Human development in the 21st Century: Visionary policy ideas from systems scientists, Cambridge University press.
- [13]黒川新二(2016) 自閉症とこどもの心の研究, 社会評論社.
- [14]Hobson, J.A., Tarver, L., Beurkens, N. & Hobson, R. P. (2015). The Relation between Severity of Autism and Caregiver-Child Interaction: a Study in the Context of relationship Development Intervention. Journal of Abnormal Child Psychology, 23, 1-11.
- [15]尾崎康子 (2016) 対人関係発達指導法 (RDI), 尾崎康子・三宅篤子編, 乳幼児期における発達障害の理解と支援②知っておきたい発達障害の療育, ミネルヴァ書房, 70-76.
- [16]Stern, D. N., Stern, N.B. & Freeland. (1998). The Birth of a Mother: How the motherhood Experience Changes You Forever. 北村婦美訳(2012). 母親になるということ 新しい「私」の誕生, 創元社.
- [17]Fogel, A. (1991). Developing through Relationships: Origins of Communication, Self, and Culture. The University of Chicago Press.
- [18]高田明(2019)相互行為の人類学 「心」と「文化」が出会う場所, 新曜社.
- [19]Lawrence, P. J., Davies, B. & Ramchandani, P. G. (2012). Using video feedback to improve early father-infant interaction: A pilot study. Clinical Child Psychology, 18(1)61-71.

Abstract

The purpose of this paper was to examine the effect of applying Relationship Development Intervention (RDI) and clarify the feature of the modification processes in a family through RDI. The participants were one family with a child who has Autistic Spectrum Disorder (ASD). The child was a 6-year-old boy, and he has a sibling. The family have continued to do RDI for the last two years.

Parent-child dyad activities were videotaped three times as Relationship Development Assessment (RDA). Three aspects of relatedness (Larkin, et al, 2010): 1) attention engagement, 2) interactive regulation, 3) interactive engagement, were assessed. And the modification process of the mother's reflection through 63 video clips with her child in daily life, for example, cooking, making something or cleaning, was categorized. The results are as follows. Firstly, three aspects of relatedness between both parents and the child have changed three times in RDA. Secondly, the contents of the mother's reflection could be categorized into five groups: 1) positive, 2) negative, 3) analysis, 4) challenge, 5) question. Category "positive" increased while "negative" decreased. During the latter half, she focused on the relatedness with her son more than the individual. Therefore, it was suggested that RDI has influenced the relatedness between the parents and the child. Furthermore, the author discussed the feature of RDI which fosters interpersonal engagement and promotes the affected individuals' initiative and flexibility and the difficulty of assessment of relatedness.

(受付日 : 2019年1月3日, 2019年9月17日)

高橋 ゆう子 (たかはし ゆうこ)

現職 : 大妻女子大学家政学部児童学科教授

筑波大学大学院修士課程教育研究科障害児教育専攻修了。

専門は臨床心理学, 特別支援教育。現在は, 発達障がい児と家族, 関係者の支援に関する研究を行っている。